

伊豆沼の外来種対策と在来種の復元 日本初の外来寄生虫の確認など

(公財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 藤本 泰文

続く外来種の侵入

新たな外来種の水辺への侵入は現在も続いている。海外からの外来種の侵入や、国内移入種の分布拡大も続いている。また、ブラックバス（オオクチバス・コクチバス）は、違法放流が今も続くなど、唯一対策の実効性が上がっていない外来種と言われる状況である（日本自然保護協会 HP 2022）。

日本で初確認のモウコチョウ

今回、伊豆沼・内沼のオオクチバス *Micropterus nigricans* (旧学名：*Micropterus salmoides*) などからモウコチョウ *Argulus mongolianus* Tokioka, 1939 という寄生虫が確認された (Nagasawa et al., 2022)。チョウ

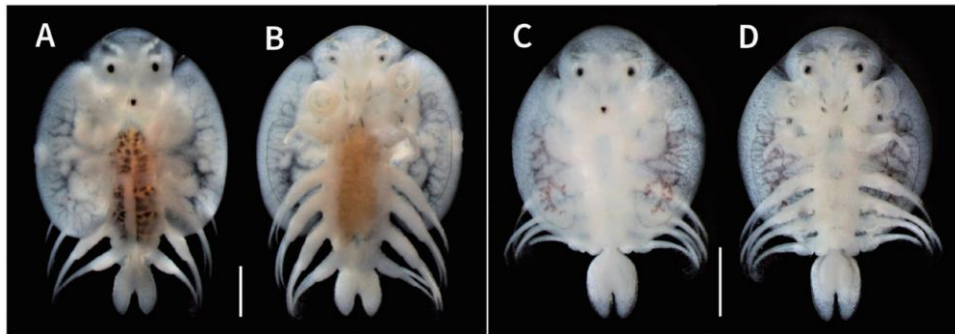


図1 チョウ *Argulus japonicus* (長澤ほか 2023 より)。在来種。

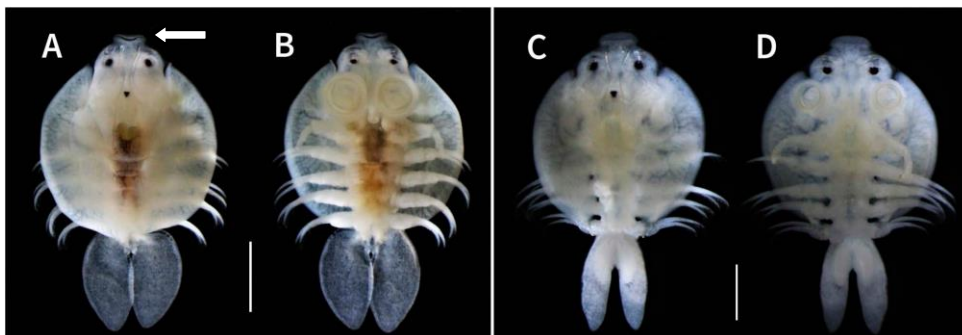


図2 モウコチョウ (Nagasawa et al. 2022 を改変)。矢印の部分が識別点。というのは、魚類の体表面や口内にいる寄生虫である。よく見られる大きさは体長4mm程度。時に10mm程度の個体も見つかる。在来種のチョウとの識別点は、まるでおちょぼ口のように突き出ているのが特徴である (図2の矢印参照)。

伊豆沼・内沼で駆除していたオオクチバスにチョウ類が寄生しているのが頻繁に観察された。当時財団に勤めていた職員が関心を持ち、水族の寄生虫学の第一人者である長澤和也先生に相談したところ、在来種のチョウではなく、日本では確認されていなかったモウコチョウであることが判明した。

モウコチョウはどこから伊豆沼・内沼にやってきた？

モウコチョウは、1938年に中国の内モンゴル地区で初めて確認された種である。中国から日本へは何らかの魚種に寄生して移入されたと考えられる。中国から日本に定着した魚種は最低でも19種類あるが、日本では1900年以来、約120年にわたって水族の寄生虫に関する研究が行われており、コイ、ハクレン、コクレン、ソウギョ、アオウオ、タイリクバラタナゴといった、数十年前に移入された魚に寄生していた可能性は低いと考えられる。オオタナゴ、ダントウボウ、コウライギギなど近年確認された魚種に寄生していた可能性がある。

その後、伊豆沼・内沼に何らかの魚種を通じて移入したのだろう。モウコチョウはオオクチバス以外にもコイ、ゲンゴロウブナ、ギンブナに寄生しており、宿主特異性は低い。漁協では少数のウナギを近年まで放流しているが、モウコチョウがシラスウナギなどに寄生して養殖場に入る可能性は低いように思える。一方で、今回寄生が確認されたオオクチバスは違法な放流活動が今も執拗に続いており(斉藤ほか 2021)、経路として、私は最も疑わしいと考えている。

いずれにしても、モウコチョウは伊豆沼・内沼以外のいずれかの国内水域に移入している。鰓蓋の内側などに付いているので、チョウ類を発見された方は、図1や2を参考に、専門家まで情報提供をお願いしたい。

引用文献

- Nagasawa, K., Asayama, T., Fujimoto, Y 2022. Redescription of *Argulus mongolianus* (Crustacea: Branchiura: Argulidae), an Ectoparasite of Freshwater Fishes in East Asia, with Its First Record from Japan. *Species Diversity*, 27(1), 167-179. DOI:10.12782/specdiv.27.167
- 長澤和也・麻山賢人・藤本泰文・新田理人. 2023. 宮城県伊豆沼産コイから採集されたチョウと東北地方におけるエラオ類の記録. *Nature of Kagoshima*. 50, 55-60.
- 斉藤 憲治・三塚 牧夫・麻山 賢人・藤本泰文. 2021. 宮城県伊豆沼・内沼集水域のため池で 池干しによる駆除後に再び現れたオオクチバス *Micropterus salmoides* はどこから来たのか?. *伊豆沼・内沼研究報告*, 15: 107-120.